オルドナンスとディスポジションについてのクロード・ペローの解釈

—ウィトルウィウス『建築十書』註解にみる構成への見解—

CLAUDE PERRAULT'S INTERPRETATION ON *ORDONNANCE* AND *DISPOSITION*—His views for composition indicated in his commentary on Vitruvius' *Les dix livres d'architecture*—

笠原 英明*

Hideaki KASAHARA

Claude Perrault's views on composition (in general) appeared in his notes of translation of Vitruvius' *Les dix livres d'architecture*, especially concerning the two of Vitruvius' six principles on architecture, *ordinatio* and *dispositio*. His interpretation on these conceptions didn't cause as much controversy as his untraditional views on proportion. But, when compared with the views of the Italian interpreters of Vitruvius, such as Daniele Barbaro and Vincenzo Scamozzi, Perrault's misunderstandings or intentional paraphrases are made clear. He understood the two conceptions with making reference to French contemporary residential architecture, and confused their original attributions, which had been re-interpreted in the regular and characteristic compositional system of the residential architecture in Italian Renaissance.

Keywords : *ordonnance, disposition, Claude Perrault, Vitruvius, Daniele Barbaro, Vincenzo Scamozzi*

オルドナンス、ディスポジション、クロード・ペロー、ウィトルウィウス、ダニエーレ・バルバロ、
ヴィンツェンツォ・スカモッツィ

序

ルーヴル宮の設計で知られる十七世紀後期フランスの建築家、医者であるクロード・ペロー(1613-1688)は、建築理論家としては、建築美に関する異端的な意見によって、建築史、美学史上の重要な論争を引き起こした。即ち、彼は、古代以来の、比例の美の明証性を認めず、ニコラ＝フランソワ・ブロンデル(1628-1688)に代表される建築アカデミーの、それを認める大勢の意見と対立した。ペローの建築理論に関する歴史家の研究は、大方これらの問題を対象としてきた。要するに、ペローの理論的側面のうちで注目されたのは、多くの場合、ペローの建築美に関する、伝統的ではない見解、そして、その根底にある新しい美の認識論であったといえる¹⁾。実際、ペローの建築に関する著作は、ウィトルウィウスの『建築十書』翻訳(1673)²⁾に始まったが、後の彼自身の著作『五種の柱式のオルドナンス』(1683)³⁾の扱った主題が示したように、彼の関心は、特に美の問題が前面に出る、オーダーという対象へと集約されていく。

ペローは、ウィトルウィウス『建築十書』の翻訳に際して、多くの註解を加えたが、なかでも重要なのが、ウィトルウィウスがその第一書第二章において、建築を成立させるところの六原理として定義した概念に対して付された、幾つかの註解である。先述の、彼の建築美に関する見解は、その六原理のうちでも、特に比例の美に関

連の深いsymmetriaへの註解において示された、その定義に対する疑問から生まれた⁴⁾。しかし、ペローの疑問は、美の問題を越えて、ウィトルウィウスの六原理の各定義全てに対して向けられるのであり、ペローによる再定義が各註解において明らかにされている。

本稿が目指すのは、六原理のうち、ペローにとって根本的な役割を持つとされる二つの原理ordinatio、dispositioの定義に与えられたペローの訳と、それらに付された註解である⁵⁾。註解においては、両概念のウィトルウィウスによる定義が、symmetriaの場合に劣らず反論を受けている。だが、この反論は、彼のsymmetriaに対する疑問が引き起こした美の問題のようには、議論を呼ばない。ペローのordinatio、dispositioについての解釈は、少なくとも建築アカデミーを中心とするフランスの建築批評においては、大過のない、穏当なウィトルウィウス解釈として了解されていたと考えてよいだろう⁶⁾。従って、美の問題の場合のように、ブロンデルとの比較によって、ペローの解釈の特性を際立たせることはできない。

それゆえ本稿は、ペローと同じくウィトルウィウスを詳細に読解したバルバロ、スカモッツィという二人のイタリア人との比較という手立てを取ることによって、彼等のordinatio、dispositioについての解釈の相違を示し、ペローの解釈の特性と、その相違がもつ歴史的意義とを明らかにすることを目的としている。ordinatio、

* 福井大学大学院工学研究科 大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Fukui Univ., M. Eng.

dispositioについての解釈は、symmetriaについての解釈に発した繊細な美の問題に関わるのではない。それは、柱式としてのオーダーの微細な部位にまで立入って、それらの比例の美的価値を検討したりはしない⁷⁾。ordinatio、dispositioというラテン語の両概念は、構成秩序、配置に関する、より一般的な意味を近世近代の西欧諸言語に引き継がせたのであり⁸⁾、この両概念についての三人の解釈においては、より広く建物の構成一般に及ぶ見解が示される。ここに、ペローと、二人のイタリア人との著しい差異が現れてくる。

バルバロ、スカモツィの二人を比較の対象としたのは、ルネサンス以来の多くの理論家のなかでも、特にこの二人が六原理の解明に際して非常に多くのことを述べた、というペローの言葉があるからである⁹⁾。実際、ordinatio、dispositioは、バルバロ、スカモツィにも、構成一般における、両概念の重要な役割を認めさせている。だが、ペローは、彼等を評価している訳ではなく、彼等の曖昧な解釈が殆んど成果を収めていないことをも指摘しているのである。ペローは彼等の解釈を忌避すべき例の代表として位置付け、自らの明解な解釈を対置していたと考えることができるのであり¹⁰⁾、この点にも、この二人との比較の意義を認めることができよう。

1. 構想の中核としての ordinatioとdispositio

ウィトルウィウスは、『建築十書』（紀元前一世紀後半）において、「建築はordinatio（ギリシャのtaxis）、dispositio（ギリシャのdiathesis）、eurythmia、symmetria、decor、distributio（ギリシャのoikonomia）から成り立つ」として、いわゆる建築の六原理を規定した¹¹⁾。そして、ordinatio、dispositioの定義は、森田慶一の邦訳によれば以下のように示される。

オールディナーティオー[ordinatio]とは、作品の肢体が個別的に度に適っていることであり、全体的比例をシュメトリア[symmetria]に則して整えることである¹²⁾。

ディスポジティオー[dispositio]とは、物をびったり配置することであり、その組み合わせによって作品を質を以て立派につくり上げることであり¹³⁾。

まず、その定義自体からdispositioが質に関わる原理であることはすぐに理解される。そしてordinatioについては、上に述べた定義文に続く補足によって、ordinatioが量に関わる原理であることが明示される。即ち、続く文章は、これが「ギリシア語でポソテースといわれる量」によってまとめ上げられること、そして、その量が、作品自体の肢体の部分からモジュール(modulus)を選び取り、それを基準寸法として、肢体の個々の部分から作品の全体を工合よくつくり上げること、を示している¹⁴⁾。

また、ordinatioの定義において登場した、別の六原理のひとつsymmetriaの定義は、

シュメトリア[symmetria]とは、建物の肢体そのものより生ずる工合よき一致であり、一定の部分が個々の部分から採られて全体の姿に照応することである¹⁵⁾

が、ここで述べられた「一定の部分(ratae partis)」とは、先述の、基準寸法となるべき量を与えるモジュールに他ならない¹⁶⁾。symmetriaは、このモジュールを媒介して通約できるような比例の美を規定した。こうして定義されたordinatioとsymmetriaは、共に、建物の部分、そして全体がモジュールによって割り切れることを要求する量的原理である。森田は、これらordinatioとsymmetriaの区別について以下のように説明する。即ち、ordinatioの定義文の邦訳

中の、最後の述語の部分「整えること」に対応する原文のラテン語comparatioには、「準備すること」という意味があることから、上記定義文の後半部分に対し、「symmetriaにしたがう比例を準備すること」という別訳を用意するのである¹⁷⁾。この訳は、ordinatioが、超越的に美しい比例を規定するsymmetriaへと「発展すべき原理」であるということを、一層明確にする。つまり、特定の尺度が、symmetriaによって、美的価値をもつ比例として規定されるのに対して、「尺度の適否は直接ordinatioの問題ではない」¹⁸⁾。量的原理である「ordinatioにおいては、尺度なき混沌としてではなく、尺度ある秩序として建物の部分が意識されれば」充分なのであり¹⁹⁾、比例の美的価値が考慮される必要はないと考えられる。

一方、dispositioは質的原理として定義されたが、続く文は、dispositioの姿は「平面図、立面図、背景図」といった図面によって表わされると述べている²⁰⁾。さらに、定義自体に戻れば、「配置すること」に対応するラテン語conlocatio自体が、既に位置や場所を示している。つまり、質の規定すべきものとは、計算によってではなく「図形によって理解される」位置である²¹⁾。こうして、dispositioは、「位置なき、無定形なものに位置、形を与える」ことによって、尺度を与えるordinatioと共に、質、量を区別して建物の秩序を分有する一対の原理となる²²⁾。そして、森田によれば、dispositioにおいても、ordinatioの場合と同様、美的価値は考慮される必要はない²³⁾。symmetriaによっては規定され得ない「質的な美」は、とりわけ姿として感知可能な美に関与する、別の原理eurythmia²⁴⁾によって規定されるが、dispositioは、同じく質的な原理として、位置、形を与えて、このeurythmiaを準備する概念として理解される²⁵⁾。

結局、ordinatioとdispositioは共に準備的であって、symmetriaとeurythmiaのように、具体的な比例を設定したり、姿形を微妙に調節したりすることによって美的価値に直接に与かることはない。それだけに、ordinatioとdispositioは、量と質を分担しながら、建築の構想のより原初的な段階に関わる一対の概念として、近世の理論家達に解釈されていくのである²⁶⁾。

以上、森田慶一に依拠して両概念の概要を把握できたが、六原理の定義に不明瞭さのあることは、古今のあらゆるウィトルウィウス研究が指摘するところである。その読解、解釈には多くの補説、或いは読み代えが必要であるが、それは、ペローにとっても同様である。彼にとっては、そもそも、この六つの概念が同列に並ぶこと自体が問題であり、それらの解釈における再構造化のなかで、ordinatioとdispositioが中心に据えられるのである²⁷⁾。そして、二人のイタリア人も、この二つの概念に、構想における重要な位置を見て取り、それらの不明瞭さを補いながらも解釈を行なっている。次章以降、三人の解釈を、年代順に検証していく。

2. バルバロ

イタリア人建築理論家・人文学者ダニエーレ・バルバロ (1513-70) もまた、ウィトルウィウス翻訳に際して、六原理の定義の不明瞭さを指摘し、翻訳自体をはるかに上回る量の註解によって説明を試みた。ordinatioとdispositioには、それぞれにordine、dispositione (disposizioneと同義) というイタリア語が対応させられる²⁸⁾。

彼は註解において、ordineの説明を行なう。まず、建物の各部分に与えられる寸法には、その決定に際して（時間的）前後関係が必

ずあり、後に定められる寸法は、先に決定された寸法を参照して決められる²⁹⁾。そして、それらは、大きさが同等でないにも関わらず、共通項(*termine commune*)の元に帰することができなくてはならない。*ordine*は、各部分が多様な寸法を持ちつつも、共通項によってまとめられるための準備である³⁰⁾。それは、「*simmetria* [*symmetria* に対する伊語]と名付けられた、寸法の工合の良さを生み出す」ように、「最初に、全部分の基準(*regola*)としての寸法量 [の決定]に着手する」のである³¹⁾。以上に示された共通項こそが、モードゥロ (*modulo*, *modulus* に対する伊語) に他ならない。モードゥロの設定は、ウィトルウィウスの第三書第三章において示される形式別の神殿を例として、説明を加えられる。例えば四柱式神殿の正面は、柱台、柱礎の突出部を除き、11と1/2に等分割され、それがモードゥロとして設定される。そうすれば、円柱に1モードゥロ、中央以外の各柱間に2と1/4モードゥロ、中央の柱間にだけ3モードゥロ、という具合に、順次、継起的に決定される寸法が、びたりと全正面を整合させ、秩序付ける³²⁾。バルバロは、*ordine*の、*simmetria*を生み出す準備をする役割、さらに、構想の発端において、適正な大きさのモードゥロを、引き続き決定される諸寸法の参照源として設定すること自体の役割を明示している³³⁾。

続いてバルバロは、ウィトルウィウスの定義に沿って、しかし、より明解に、「*dispositione*は、作品の諸部分を、大きさや量として検討するのではなく、適切な場所(*proprio luogo*)に配置されるべき部分として検討する」³⁴⁾と述べる。また、*ordine*の規定するところの、諸部分の大きさの基準となるような共通尺度(*commune misura*)を見出すだけでは充分ではなく、「その場所に置かれるべき事物(*cose da essere poste al suo luogo*)として部分を検討することによって」、諸部分をもつ事物の質的な秩序を見出す必要もあるとする³⁵⁾。彼にとって、よき質とは、「諸部分のよき配置」³⁶⁾から、全体構成のうちに生まれるものなのである。

さらに、*ordine*には算術、*dispositione*には図学と幾何学という、両者に必要とされる学問の違いが、両者の違いを一層明確にする³⁷⁾。即ち、*ordine*は、計算による抽象的な数の設定にのみ与かり、図面上、敷地上での検討を行なわない。それは、専ら*dispositione*に委ねられる訳である。バルバロは、ウィトルウィウス自身はさほど明確しなかった、両概念の対比によって、*ordine*と*dispositione*それぞれの役割の違いを、一層明確にした。この方法は、森田のような現代の研究者にも用いられているのであり、バルバロはその先駆者であるといえる。そして、先に森田から得た概要は、バルバロの、ここまでの帰結に概ね含まれている。

またバルバロは、ウィトルウィウスが彼自身の書の各所において*dispositio*という語によって指し示していたものは、実際二種類あるが、彼の原理の定義においては、そのうち一方しか明らかにされていないと考える³⁸⁾。即ち、ウィトルウィウスの定義が示していたのは、芸術の規則、つまり、*simmetria*の実現において何ら障害を持たない場合の*dispositione* だけである。他方、定義においては言及されていないにも関わらず、実際に、第六書第二、三章の住居建築の計画において示されていたのが、敷地、用途等の要件によって、芸術の規則の実現には制約が与えられる場合の*dispositione*である³⁹⁾。バルバロは、この原理の十全な理解のためには、後者に関して、ウィトルウィウスの不足を補う、新たな説明が必要であるとする。

その住居建築の計画の過程では「(*ordine*と*simmetria*を追求するように) 尺度の理法」を規定することが「まず最初に」行なわれ、それに基づいて、場所の性質、用法、美を想定して加減を行なうといった適切な調整が続く、というウィトルウィウスの記述が、バルバロによって意識を加えて引用される⁴⁰⁾。ここでバルバロは、上記

() 括弧内の、彼自身の追記によって、原理「*ordine*と*simmetria*」をこの過程の最初に位置付ける。そして他の六原理も、続く過程のうちに位置付けられ、そして結局は、*dispositione*が六原理を統括的に考慮するという、ウィトルウィウスの述べなかった関係が示されるのである⁴¹⁾。先にみたように、バルバロにとっての*dispositione*は、実際に「適切な場所」に配置しての検討を求めるのだから、こうした拡張された解釈は必須となるであろう。バルバロは、規則の実現に制約がある場合の*dispositione*を、原理として、そして他の原理との連関に注目して、解釈し直した。ここで強調しておくべきことは、*ordine*が構想の最初の段階に位置し、*dispositione*が総合的な事後調整を行なうという、両者の関係である。

3. スカモッツィ

バルバロと同じイタリア人の、建築家・理論家であるヴィンチェンツォ・スカモッツィ(1552-1616)は、その著作『普遍的建築のアイデア』(1615)において、ウィトルウィウスの六原理への参照を明らかにしながらも、それらを忠実に解釈することには拘らず、自らの六原理に転化させている⁴²⁾。そのうち、*ordinatio*、*dispositio*は、バルバロと同様、*ordine*、*dispositione*に対応すると考えられる。

スカモッツィの*ordine*は、「形態(*forma*)に関わり、各部分が適切な場所(*luogo proprio*)を持つための、各部分の、基準をもった(*regolata*)、先と後である。そうすれば、それらが、量や大きさに関して様々であるとしても、それらは、各々の場所に配置される」⁴³⁾と定義される。ここでは「適切な場所」なる語が登場してはいるが、それは各部分が「基準をもった」場合の帰結にすぎないとも考えられる。しかし、この定義文からだけでは、*ordine*が専ら量に関与するという属性が保持されているのかどうかは、十分に明確にならない。だが、別の箇所でも、*dispositione*との、量と質の分担は明示される⁴⁴⁾。ただ、スカモッツィは、バルバロの場合のように、*ordine*の関与するところを、算術的な寸法決定には限定せず、さらに「形態に関わる」という言葉によって、図上での検討をも示唆している。

一方、スカモッツィの「*dispositione*は、各部分の*ordine*に応じて、敷地、形態、素材、季節の質を配慮することであると理解される。というのは、敷地(*sito*)に関しては、その各部分が、それぞれの適当な場所にあるように、建物全体の配置(*collocatione*)が検討されるためである。形態(*forma*)に関しては、それが躯体全体に、そして、その部分の各々にも同様に釣合っているように...」⁴⁵⁾という定義では、考慮すべき要件が多数挙げられているが、*dispositione*が、質として、敷地、形態を考慮することを示している点、そして、「*ordine*に応じて」という句が、*ordine*の要求の*dispositione*に対する先行を示唆している点は、バルバロとの近さを感じさせる。

そして、スカモッツィは、別の箇所でも、*ordine*、*dispositione*だけではなく、六つの原理のそれぞれが、建築の構想において考慮されるべき順序を述べている。これは、ウィトルウィウスにもバルバロにもなかった独自の解釈である。そこでは、量的原理である*ordine*

は、構想の最初の段階に明確に位置付けられ、質的原理である *dispositione* はそれに続き、従うことが明示される⁴⁶⁾。

ordine と *dispositione* の関係に注目すれば、以上のスカモッツィの解釈は、多くをバルバロより踏襲しているが、*ordine* が形態にも関するとされる点は異なる。しかし、この関与の意義を、彼の原理に関する記述から、これ以上に求めることは困難である。スカモッツィは、バルバロのように、原理の解釈、説明を第一目的とする人文学者ではない。しかし、スカモッツィの重要な点は、彼が建築家として、*ordine* と *dispositione* の関係を、自らの建物の設計過程において反映させていることにある。

スカモッツィの主要な設計課題は、教会等に比べて複雑に分節された内部空間を持ち、利便性への一層の配慮を求める、有力者のための住居建築である。F. ショエは、利便性に関して、スカモッツィが都市によって様々な要求があることをよく理解し、近世西欧の建築書に、初めて比較文化的な広い視野を採りれたことを評価する⁴⁷⁾。実際、スカモッツィは、彼の活動拠点であるヴェネト地方のみならず、イタリア諸都市、さらには外国の都市での住居建築の計画さえも、図版を付して、それらの差異を意識しつつ論じている⁴⁸⁾。しかし、そうして配慮された計画においても、彼が述べた、各原理が考慮されるべき順序が反映させられていると思われるのである。彼は、平面構成の一般理論において、設計の行程を説明する。

平面は多様な方法によって分割されよう。しかし我々の創意から、我々は、それを、あたかも柱間が円柱やピラスターの中心間にできるように、適当な大きさへと、等間隔に分割する方法を用いる⁴⁹⁾。そして壁は、円柱、ピラスターのように扱われ、諸室に、等分割された空間の幾らかずつを割り振る。

このようにして、全ての大小の部分は、それぞれに均整 (*corrispondenza* [ウィトルウィウスの *symmetria* に対してスカモッツィの与えた伊語])、比例をもつ。しかしこれは次のような場合には成功しない⁵⁰⁾。続いて、スカモッツィは、成功しないのは、パルミヤやピエーディといった当時の寸法単位で分割が行なわれるときである、と述べる。G. ハーシーの指摘に従えば、スカモッツィが示しているのは、間取りにおいて、用いられるのが絶対寸法単位であり、建物の部分から採られたモードゥロが考慮されない場合である⁵¹⁾。ここで注目すべきは、以上の設計の行程と、バルバロが *ordine* についての解釈において例示した、神殿のモードゥロ設定の類似性である。スカモッツィは、ここで、神殿の *ordine* に感化されて、等分割、円柱という言葉を用いているようである。しかし、ここで想起されるグリッド状の等分割は、既に図上での検討である。そして何より、バルバロによって、構想の発端において決定された、共通項 (*termine commune*) と呼ばれるべきものが、円柱の直径から、等分割されて、後に間取りを行なわれるべき空間へと変化している。この点において、ハーシーが指摘したように、スカモッツィをはじめとするイタリアの建築家は、ウィトルウィウスが神殿に関して述べた考えを、発展応用させたのであり、円柱のモードゥロによる構成法に加えて、実際には壁構造であるパラッツォ、ヴィラの間取りにも一層適用可能な、空間のモードゥロによる構成法を練成したとののだといえる⁵²⁾。そのとき、共通尺度により等分割されたグリッド状の空間の枠組みは、既に図、敷地を前提としているのであるにせよ、*dispositione* に多くの質的要求を考慮させる余地を残す、質的な個性を与えない均質な枠組みである。建築の構想の発端として、やは

り *dispositione* に先行してモードゥロを設定し、さらに、よき比例の発現を準備するという点において、この枠組みは、近世的に翻案された *ordine* によって決定されているのだと考えることができる。

ハーシーによれば、スカモッツィは、以上の構成法をルネサンス以来の、どの理論家よりも完成に近づけた。それは、柔軟さも兼ね備えており⁵³⁾、利便性を考慮した多様な間取りに対応するであろう。だが、スカモッツィの能力は、あくまでも上記の枠組みを維持しながら、そのなかに、間取りを適応させる能力なのである。

4. ペロー

以上の二人のイタリア理論家の解釈を踏まえて、ペローの解釈の特性を考察していきたい。その前に、ウィトルウィウスに始まり、近世イタリアを経て、ペローに至るまでの、*ordinatio*、*dispositio* の対概念の対応を挙げて整理すると、

<i>ordinatio</i>	<i>ordine</i>	<i>ordonnance</i>
<i>dispositio</i>	<i>dispositione</i>	<i>disposition</i>

のようになる。

以上のように、ペローによって、*ordinatio* には、構成秩序一般を示すフランス語であるオルドナンス (*ordonnance*) が対応させられる。その定義の訳文は、以下の通りである。

'L'Ordonnance est ce qui donne à toutes les parties d'une bastiment leur juste grandeur, par rapport à leur usage ; soit qu'on les considere séparément, soit qu'on ait égard à la proportion ou symmetrie de tout l'ouvrage⁵⁴⁾ . (下線強調は筆者による)

(オルドナンスとは、部分を個別に考えるにせよ、また、建物全体の比例、即ちシメトリーを考慮に入れるにせよ、建物の全部分にそれぞれの用途に関連付けて、適正な大きさを与えるものである)。

続く訳文では「このオルドナンスは、ギリシア人がポソテースと呼んだ量に依拠し、この量は、建物全体や、個別の部分の各々を規定するために採用されたモジュール (*module* [modulus に対する仏語]) に依拠する」ことが穏当に示される。しかし、定義訳文では「適正な大きさ」に対して「それぞれの用途に関連付けて (*par rapport à leur usage*) 」という、ウィトルウィウスやその解釈者が意図しなかったであろう意味を与える非常に重要な副詞句が付け加えられている。ペロー自身は、ウィトルウィウスの前出邦訳においては「度に適っていること」と訳されている部分に対応する、原文のラテン語 *commoditas* を解釈して該当箇所の訳を行なったと説明している⁵⁵⁾。森田によれば、*commoditas* は、一般には「便利な、都合の良い、具合の良い」といった意味に用いられる形容詞 *commodus* より導かれる名詞であり、ウィトルウィウスの文章においても、その意味での用法は多い。しかし、森田は、*com-modus* と分解できる *commodus* は、第一義的には、明確に尺度を表わしていた *modus* の意味を維持して、適当な尺度を有する状態を意味していたと指摘し、定義文が意味していたのは尺度的に「度に適っていること」であったとしている⁵⁶⁾。そして、*commoditas* にはフランス語の *commodité* が対応する。この語は、ラテン語のごとく尺度を想起させることはもはやないにせよ、「便利な」よりは限定の小さい、「適正な」の意味を未だ当時に残していた形容詞 *commode* の名詞形である⁵⁷⁾。この語が訳語として用いられたとしても大過はなかったと思われる。実際、1547年のJ. マルタンの仏語訳では率直に *commodité* が用いられている⁵⁸⁾。W. サンビアンは、ペローがマルタンの *commodité* を排

して 'par rapport à leur usage' を新しく加えて意識した理由として、彼が曖昧さを避けた点を挙げている⁵⁹⁾。しかし、別の理由も指摘できるであろう。以下に述べるように、尺度的な適正さを保証するところの、ordinatio—ordineが規定していた、モジュール或いは共通尺度に従うことの価値をペローが認めておらず、理解していないことが、ここで予示されていると考えられるのである。

そして、訳本文よりもはるかに長い、彼の註解は、彼固有の見解を一層強く表わしている。そこでは、彼は、住居建築の（平面）構成を例として、日照や収容する人員によって決定されるべき前庭、広間、寝室等の部屋を具体的に挙げる。そして、オルドナンスが、「それぞれが意図された用途に供するための(pour servir aux usages)」適度な大きさを、それらに与えることを示して、先にみた訳本文の意識箇所を補説している⁶⁰⁾。ここで明らかになるのは、ペローが、オルドナンスの考慮する量を、面積或いは容積といった、図面上、敷地上の拡がりを前提にしてしか考慮できないものとして、解釈していることである。そして何よりも重要なことに、ここ註解においてはモジュールへの言及が消えている。従って、ペローが「建物のオルドナンスは、使用しようとする場所の分割によって成り立つ」⁶¹⁾とすると、オルドナンスは、バルバロの解釈とは異なり、図面化以前の段階において、モジュールの設定によって抽象的、算術的な分割を検討するのではない。オルドナンスは、明らかに、拡がりのある図面、敷地を既に想定して、モジュール未設定のままに、かつ、用途を決定要因として、空間を分割することを検討しているのである。結局、「量」の解釈の違いによって、ペローのオルドナンスは、バルバロのordineが有していたような、モードゥロ或いは共通尺度の設定を図面上での検討に先行させることにより建築的構想を支配する力を、著しく減少させている。即ち、オルドナンスは、質的な要求に先立つべき量的秩序であることを認められていないのである。

そして、ウィトルウィウスのdispositioには、配置一般を示すフランス語であるディスポジションdispositionが対応させられる。その定義の訳文は、以下の通りである。

Disposition est l'arrangement convenable de toutes les parties, en sorte que elles soient placées selon la qualité de chacune ⁶²⁾.

(ディスポジションは諸部分が各々の質によって置かれるような、全ての部分の適度な配置である)

ここでは、ディスポジションが、量的なオルドナンスに対置される質的な配置の原理であることが穏当に示されている。しかし、森田の指摘するように⁶³⁾、前出邦訳の「立派につくり上げること」という箇所は欠落している。この欠落は、オルドナンスが、本来、ディスポジションが関与すべき、即ち、dispositio—dispositioneが考慮するとしていた、図面、敷地を、既に想定してしまっていることを原因とする。「立派につくり上げること」には、ウィトルウィウスの原文のラテン語elegans effectusが対応する。バルバロは、この形容詞elegansに、洗練された(sciolto[scelto])に加えて、完成された(sbrigato)、明確な(netto)というイタリア語をも対応させる。それによって、elegans effectusが、美的な帰結であるのみならず、抽象的な数量決定に留まり明確な姿形を考慮しない段階から、事物を「場所」に置くことにより、完成され、明解になった、具体的な帰結であることを、バルバロは理解したのである⁶⁴⁾。ペローによつてはordine—dispositioneの関係が示す、抽象から、具体への進展の意味

は、理解されなかった。

そして、ペローの註解では、再び住居建築の（平面）構成が例となり、玄関、広間、前室、寝室、キャビネ、ギャルリーといった部屋が示される。そして、ディスポジションが、建物の「全部が質に従って各々の場所(lieu)に置かれている」ことを示す、という説明が加えられるが、ここでいう「質に従う」とことは、具体的には、その性質(nature)と用途(usage)に応じて、これら諸室がなすべき順序に並ぶことである⁶⁵⁾。ここでは、用途を、彼のオルドナンス解釈において示されたような面積決定と共に、諸室の並び順決定の要因にしようとする、ペローの強い意図が読み取れる。しかし、この意図に関しては結章において別の事項に関連させて述べる。

ペローのオルドナンスとディスポジションでは、ウィトルウィウスや近世理論家達の定めた、両概念の考慮すべき領域の境界がなくなっていたことは明らかであるが、ペローが両概念間の差異を認識し難くなっていることを明確に示す箇所が他にもある。彼にとって、ウィトルウィウスがdispositioだけに帰すところの「三種の図面は、オルドナンス、ディスポジションの両者に属するはずである」⁶⁶⁾。なぜなら、それらは、諸部分の大きさだけではなく、順序や位置をも示すからである。ペローの意見では、ウィトルウィウスは「図面がオルドナンスをも包含すること、そして、実際、オルドナンスは、正しくいえば、作品全体のディスポジション[配置図]の一種にほかならないことを理解すべきだった」⁶⁷⁾。結局、ペローによれば、フランスの慣用では、そもそも図面としてのディスポジションは、ウィトルウィウスのordinatio、dispositioという対概念を共に含み、両概念の区別は全く必要ないのである。

以上の見解は、初版にはなく第二版において加えられる註のひとつが与える、以下の結論を理解させる。即ち、「我々がオルドナンスと呼ぶものは、五種のオーダーの比例や様々な性格の規則を与えるところのものであり、ウィトルウィウスがordinatioと呼ぶものとは別物である」⁶⁸⁾。ここで、ordinatio—ordineはオルドナンスへと変化するに及んで、専らオーダーに適用を限定されることになった。ペローのこの帰結は、続く建築（理論）家達にそのまま受容されることはなく、オルドナンスの、広く構成一般を示す意味がなくなる訳ではない⁶⁹⁾。しかし、ペローの見解の帰結の要因であった、モジュール或いは共通尺度に対する、ウィトルウィウスの伝統に沿った理解の欠如は、引き継がれてゆく。その結果、オルドナンスは、広く構成に関わるにせよ、ディスポジションと混同されて、その類義語にすぎないものとなる⁷⁰⁾。

結 ordineとdispositioneの差異の消失とフランスの住居建築の展開

バルバロとスカモツィによって理解された、構想においてordineとdispositione両概念の考慮する領域の区別、そして、それらが考慮される順序の明確化は、現代の我々には不要に思われるかもしれない。しかし、ハーシーが示したような、古代の神殿において「できる限り、建物を言葉と数へと翻訳する試み」⁷¹⁾に与えられていた至上の価値が、近世建築（理論）家によつても理解され、それが、数量に関わるordineの先行的な地位の根拠になったと考えられる。そこでは、数の抽象的な表記を頂点とし、図面、模型、具体的な構造の順に低くなる価値の序列が確立されていたのである⁷²⁾。

ただし、ウィトルウィウスによって、上記の価値がある程度満足

に反映させられたのは、神殿の構成だけであった。そこでバルバロは、神殿だけではなく、古代の住居建築の構成にも適用できる、dispositioneの、原理としての定義を再考したが、その結果、その柔軟な調整的特性こそが重要であることを認めた。しかしその一方で、調整以前の大前提として、ウィトルウィウスにおいては明らかではなかった、ordineの先行を示したのである。そしてスカモッツィは、自らの設計課題において、住居の計画の、文化、地域による相対性を十分に意識していた。しかし、ordineを翻案して、種類の違いを越えて近世の課題に柔軟に適用させることによって、依然としてordineの先行を、設計に反映させることができた。彼の場合、同時代のマニエリスムの傾向を意識して、自由なdispositioneが予測させる放縦⁷³⁾を制するために、ordineを先行させる意図があったという指摘もできよう。以上のように、二人は、考察対象、そして理由こそ違え、必須であったdispositioneへの柔軟な対応を意識するが故に、その裏返しとして、ordineとdispositioneの区別を意識し、前者の先行を示したのだと考えることができる。

だが、数の並記だけで（具体的比例は未決定でよい）、全体のイメージを把握できると考えさせるような、分節化された部分から成る全体を持つ類型の存在を前提にして初めて、適切なモードウロを、具体像の決定に先んじて選ぶことが可能となる⁷⁴⁾。スカモッツィが、ordineを翻案し、グリッド状の空間の先行的枠組みを計画の一般原理において想定することができると考えるのなら、彼は、以上の思考を適用しやすい類型を、住居にも要求しなくてはならない⁷⁵⁾。

ordinatio, dispositio両概念間の差異を認めないペローの解釈は、そのような住居建築の類型が彼によっては認められていないことを暗示している。彼の解釈は、同時代の建築アカデミーの議論における、イタリア建築の構成に対しての具体的な批判に対応する。スカモッツィのある住居の計画案は「諸室が同じ大きさで揃っている」⁷⁶⁾ことを批判され、グリッド状の枠組みに則ったであろう平面構成が否定される。そして、同様に規則的なセルリオの住居計画案は、「平面形の整形さ(régularité)に執着した」ものであり、「その平面は、内部の間取りを犠牲にして、十字型をなしている。それは、全く便利ではない(rien de commode)」⁷⁷⁾。これらの批判は、ボッロミーニ等の曲面を多用した形態に代表される、当時台頭してきたバロックへの批判を越えて、イタリア近世建築の、整形で、正統な類型にも及ぶ根の深いものである。そして、その批判の根拠として繰り返されるのが、利便性(commodité)の欠如である。イタリア人バルニーニは、ルーヴル宮計画のために招聘されたが、当初提出した曲面ファサードを、指摘に従って、直線的なものに改めた。それでも、平面計画における利便性の欠如が、バルニーニ案拒否の大義として最後まで主張された⁷⁸⁾。この種の批判が、オールドナンスを用途に関連付けるというペローの意識に反映したと考えられる。

実際、特にこの時期以降のフランスの住居建築の間取りは、イタリアのそれ以上に、一層細かく分節化、多様化され、機能的であることを求めているのであり⁷⁹⁾、この特徴が、イタリア建築の構成の欠点を指摘するためには最も有効なものとなった。ディスポジションの註解において、ペローが住居建築の部屋を幾種類も挙げ、それらに必然的な並び順があるのを強調したことも、この点を反映している。ペローの構成に関する思考においては、以上のような特性をもつ同時代の住居の構成、特に平面構成が、建築の構成の正当性を

考慮するための重要なモデルとなっており、ここに、彼がイタリア理論家のようにordinatio, dispositio両概念間の差異を解釈できなかったと同時に、彼がその理解に意欲をみせない前提があったと考えることもできる。ペローの思考は、以降、十八世紀前半までのフランスの最重要建築課題となる、有力者のための住居建築の構成、特に平面構成が、変容を求め続けていくことを、そして、その変容のなかでは、イタリア近世の理論家が認めてきたような「尺度的な適正さ」が、もはや重要ではなくなることを示している。

註

- 1) 建築家としてのペローに関する研究のうちで、理論的側面を集中的に扱ったものとして、以下の著作が挙げられる。W.・D. Brönnner: *Blondel - Perrault, Zur Architekturtheorie des 17. Jh. in Frankreich*, Bonn 1971. W. Kambartel: *Symmetrie und Schönheit: über möglich voraussetzungen des neueren Kunstbewusstseins in der Architekturtheorie Claude Perraults*, München 1972. W. Herrmann: *The theory of Claude Perrault*, London 1973.
- 2) Vitruve: *Les dix livres d'architecture de Vitruve*, trad. et noté par C. Perrault, 2ème éd., Paris 1684 (1ère éd., 1673).
- 3) C. Perrault: *Ordonnance des cinq espèces de colonnes selon la méthode des anciens*, Paris, 1683.
- 4) Vitruve, op.cit., p.11.
- 5) Ibid., pp.9f.
- 6) ヘルマンは、論争を引き起こした、彼の註解に始まる比例論は別として、全般的には、ペローの翻訳は同時代人から大きな評価を得ていたことを示している。ブロンデルも例外ではない。Herrmann, op.cit., p. 199.
- 7) この方法は特にブロンデルにおいて顕著である。N・F. Blondel: *Cours d'architecture*, Paris, 1675-1683.
- 8) ラテン語の ordinatio, dispositio には、フランス語では、それぞれに ordonnance, disposition が対応する。これらは多くの意味をもつ語であるが、ペローが用いたような、建築の構成に関わる意味としては、現在の辞典においても、配置、配列、構成、順序(ordonnance), 配列、配置、レイアウト(disposition)といった意味が、重複しつつ示されている。『ロベール仏和大辞典』小学館, 1988, art., ORDONNANCE, p. 1703, DISPOSITION, p. 781.
- 9) Vitruve, op.cit., p.9, n.1.
- 10) ペローは、「事物の真理を発見したことよりも、アリストテレスの言葉の正しい意味を見つけ出したことに敬意を表わす知識人」と、古代を過剰に敬う建築家を同様に非難している。C. Perrault, *Ordonnance*, op.cit., pp.xviii f. 後にもるように、バルバロ、スカモッツィは、ordinatio 解釈においてアリストテレスを参照する。バルバロはアリストテレス研究者でもある。
- 11) ウィトルウィウス:『ウィトルウィウス建築書』森田慶一訳註, 東海大学出版会, 1979, 第一書第二章, pp.10f. なお、引用文は、訳者自身の著作である、森田慶一:『建築論』東海大学出版会, 1978, p.174, の中の、ラテン語で各概念が表記されている、該当箇所邦訳である。
- 12) ウィトルウィウス前掲書, 第一書第二章, p.11.
- 13) 同上.
- 14) 同上. modulus は、一般に尺度を示す modus に縮小を示す接尾辞 ulus が付けられたものであり、本来小さな尺度を示すが、基準の尺度、さらには規範といった派生的意味を併せ持つ。古代建築の代表的な modulus は、円柱の下部直径であるが、それに限定されるものではない。
- 15) 同書 p.12.
- 16) 森田慶一:『建築論集』彰国社, 1958, pp.36f.
- 17) 同書 p.83.
- 18) 同書 p.77.
- 19) 同書 p.84.
- 20) ウィトルウィウス前掲書, p.11.
- 21) 森田慶一前掲書, p. 92. また、「配置すること conlocatio」は、ラテン語動詞 conlocare の名詞形である。これは cum (共に、を意味する接頭辞) と locare (場に置く、定位する、を意味する動詞) が合成された語である。
- 22) 同書 pp.92f.
- 23) 同書 p.93.
- 24) 「エウリュトミア[eurythmia]とは、美しい外貌であって、肢体の組み立てにおいて度に適って見えることである」。ウィトルウィウス前掲書, p.11.
- 25) 森田慶一前掲書 p. 127.
- 26) 森田は、後の『建築論』においては、ordinatio-dispositio を symmetria-eurythmia の「上位概念」として位置付けている(前出、森田『建築論』, pp.174-179)。本稿は、バルバロ、スカモッツィの ordinatio, dispositio 解釈において、それらが構想において検討される順序を考察するため、とりわけ『建築論集』が指摘する、ordinatio-dispositio の「準備的な」性質に注目する。
- 27) 残りの原理は、この両者を完全なものにするために考慮すべきものであるとされる。Vitruve, op.cit., p. 9, note.1., p. 10, note.2. なお、ペローは、六つの概念を、原理 principe ではなく、部門 partie と称している。しかし、本

- 稿は、ここまで六概念の概要把握のために依拠した森田に従って、この六概念を示す場合、一貫して「原理」とする。
- 28) Vitruvio : *I dieci libri dell'architettura di M. Vitruvio tradotti e commentati da D. Barbaro*, secondo ed., Venezia 1567, p.28. 本稿の引用は、この版による。なお、同書の読解に関しては、カイーの著作における、バルバロの記述に対する仏訳、それに対する解説を参照した。また、カイーは、本稿が参照したバルバロのイタリア語第二版以外にも、イタリア語第一版 (Venezia 1557), ラテン語版 (Venezia 1567) をも参照しているため、それらの訳も参照した。P. Caye : *Le savoir de Palladio, architecture, métaphysique et politique dans la Venise du cinquecento*, Paris 1995.
- 29) Vitruvio, op.cit., p.28. Caye, pp.177-8.
- 30) ordine は、そうした共通項を欠くことのない「不等化の準備」である。Vitruvio, op.cit., p.28.
- 31) Ibid., pp.28-9. Caye, p.179. []内は引用者の補充。以下同様。
- 32) Vitruvio, op.cit., p.28, ウィトルウィウス前掲書, p.76. ここで注目されるのは、バルバロが、オーダー(genus)の種類ではなく、神殿の全体構成(species)の種類を挙げて、モードゥロの説明を行なったことである。カイーによれば、数量的全体性についての、モードゥロと作品との関係は、オーダーよりも、建物の平面形式において明確になる。Caye, op.cit., p.212.
- 33) simmetria はこのような設定を元にした、寸法の体系であり、「ordineの美」である(同様に「eurythmiaはdispositioの美である」)。Vitruvio, op.cit., p.34. しかし、バルバロは、ウィトルウィウスが、ordinatioの定義においては、基準としての寸法量自体というよりは、その寸法の帰結としての symmetriaを定義しているにすぎないと指摘する(この箇所はイタリア語第二版にはなく、ラテン語版 p.18 にある。cf. Caye, p.180)。よって、バルバロはその不足を補って、ordine 特有の属性を説明するために、アリストテレスの『形而上学』第五巻の配列(taxis/ordine に対応するギリシア語)に関する記述を参照せざるを得なかったのであろう。アリストテレスはそこで、「より先、前」と「より後、後ろ」の概念的哲学的、普遍的定義を示している。バルバロは、その箇所を参照して、ordine の含意する、順序、継起性を、建物の部分の寸法決定の前後関係に反映させたと考えられる。アリストテレス『形而上学』岩波文庫, 1998, p.181. Caye, op.cit., pp.211-2.
- 34) Vitruvio, op.cit., p.29.
- 35) Ibid.
- 36) Ibid.
- 37) Ibid., p.30.
- 38) Ibid., p.29.
- 39) Ibid. p.29. 前者は, dispositione che dell'artificio, o dal sapere, 後者は dispositione che dal caso, o dalla necessità として示される。cf. Caye, op.cit., p.218. ordine の註解では、専ら、神殿を例に説明が行なわれ、dispositione の註解の場合のように、住居建築が登場しなかったことが注目される。
- 40) Vitruvio, op.cit., p.29. cf. ウィトルウィウス前掲書, pp.153ff. 特に第六章第二章第四, 五節. 具体的に調整されるものとして、円柱の寸法と、諸室の寸法が挙げられるが、バルバロのこの註解において重要なのは後者である。
- 41) Ibid. cf. Caye, pp.218-9.
- 42) V. Scamozzi : *L'idea della architettura universale*, Venezia 1615, Parte Prema, Libro Primo, p.8.
- 43) Ibid. この定義に際し、スカモッツィは、アリストテレスへの依拠を明言している。用語の共通性から判断すると、バルバロと同じ箇所を参照しているようである。「先と後」については、前註33)参照。
- 44) Ibid., p.38.
- 45) Ibid., p.8.
- 46) Ibid. スカモッツィの六原理では、ordine, dispositione, distributione, corrispondenza, venustà, decoro, のそれぞれが、この順に前段階の原理に依拠して考慮される。なお、スカモッツィのこの箇所の記述には誤植があるという C.ヤンナーコの指摘に従って、彼の示す修正を参照した。C. Jannaco : "Barocco e razionalismo nel trattato d'architettura di Vincenzo Scamozzi" in *Studi secenteschi*, 2, 1961, pp. 53f.
- 47) F. Choay : *La règle et le modèle, sur la théorie de l'architecture et de l'urbanisme*, 2ème éd., Paris 1996, p.248.
- 48) Scamozzi, op.cit., Parte Prema, Libro Terzo.
- 49) Scamozzi, op.cit., Parte Prema, Libro Primo, p.48.
- 50) Ibid.
- 51) G. L. Hersey : *Pythagorean Palaces, Magic and Architecture in the Italian Renaissance*, London 1976, p.60.
- 52) Ibid., passim., 特に p.162. なお、ハーシーは、この等分割された共通単位をモジュールと称するが、スカモッツィ自身はこれについて、特に名を与えていない。Ibid., p.60.
- 53) Hersey, op.cit., pp.59-63, pp.84-87. ハーシーは、様々な尺度が混在するグリッドが、初期ルネサンスの、より規則的な格子から、柔軟な対応をすべく発展してきた過程を示している。Ibid., passim., 特に p.190.
- 54) Vitruve, op.cit., p.9.
- 55) Ibid., p.10, note.3. なお、この註解は 1673 年の初版ではなく、1684 年の第二版で追加されたものである。
- 56) 森田『建築論集』, pp.74-6.
- 57) 当時の commode は、適切な propre, そして適当な convenable, といった語との類義性を持っていた。Dictionnaire de l'Académie française, 1ère

- éd, Paris 1694, art., COMMODE, p.214. 現代の辞典では、以上の意味はなくなり、便利な、好都合な、簡単な、快適なといった意味に限定されている。前出『ロベール仏和大辞典』, art., COMMODE, p.509.
- 58) Vitruve : *Architecture ou art de bien bastir, trad. par J. Martin*, Paris 1547, in Szambien : *Symétrie, goût, caractère, théorie et terminologie de l'architecture à l'âge classique*, 1550-1800, Paris 1986, p.85.
- 59) サンビアンは、マルタン訳における用法は、例えば同時代の Ph. ド・ロルムの建築書における主な用法(利点, 必要性, 有用性を示す実践的な用法)との隔たりによって混乱を招くものであったとしている。Szambien, op.cit., p.85, p.87.
- 60) Vitruve (par Perrault), op.cit., p.10, note.2.
- 61) Ibid.
- 62) Ibid., p.10.
- 63) 森田前掲書, p.85.
- 64) ラテン語の形容詞 elegans は、「外に」を表わす接頭辞 e, 「集める」を表わす動詞 legere, 現在分詞語尾の ans から成る語であり、選び出すような、という原義を持つのであり、バルバロの拡張された解釈を理解させる。対応する現代フランス語 elegant も含意するような美的価値は、選び出す程に優美であるという派生的意味を継承していると考えられる。カイーは, elegans に対して、フランス語で「明確な(de précision)」という句を充てて、バルバロの解釈の理解を試みている。Caye, op.cit., p.182.
- 65) Vitruve, op.cit., p.10, note.2. ここでの「順序」には ordre という語が対応するが、他の註においては、この語は、「連続(suite [suite])」又は「連関(liaison)」と言ひ換えられており、オールドナンスとの関連はないと考えられる。Ibid., p.28, note.4.
- 66) Vitruve, op.cit., p.10, note.4.
- 67) Ibid.
- 68) Ibid., p.28, note.4.
- 69) この語のペロー以降の建築(理論)家による用法の展開については、Szambien, op.cit., pp.127ff.
- 70) 例えば、カトルメルは「ウィトルウィウスは、建築を構成する全てのもののうち、オールドナンス、ディスポジション、ディストリビューションを区別しようとした。しかし、この区別は非常に恣意的である。これらの語の用法が、幾らか明確な違いを示していたのだとしても、今日では、それらの違いを見分けることや、それらに対応するフランス語の意味において、それらのニュアンスの違いを受け容れさせることは困難である」と述べている。A.-Ch. Quatremère de Quincy : *Dictionnaire historique d'architecture*, Paris, 1832, t. II, art., ORDONNANCE, p.173.
- 71) Hersey, op.cit., p.21.
- 72) ハーシーは、ウィットコウワの提出した調和比例論が見過した、数自体のもつ価値を強調する(例えば 8:6 と 4:3 は比としては同等だが、8, 6. という数には特性があるので、価値としては同等ではない、等)。Ibid. pp.7-8. しかし、彼の方法に反論し、ウィットコウワの方法を重んずるミトロヴィッチのような研究者もいる。しかし、本稿の主題にとっては、こうした議論はさほど重要ではない。数のピュタゴラス的象徴性や音楽的調和比例の価値の有無以上に、ハーシーの示した、空間的モジュールによる建物の分節そのもの、そして、その分節の、建物の全体構成への適用の方法が、本稿の視点にとっては重要である。R. ウィットコウワ : 『ヒューマニズム建築の源流』中義森宗訳、彰国社、1971. B. Mitrovic : "Palladio's Theory of Proportions and the Second Book of the Quattro Libri dell'Architettura" in *Journal of the Society of Architectural Historians*, Sept., 1990, pp.279-292.
- 73) スカモッツィは、放縦を抑制すべく、創意は単純で規則的でなくてはならないと述べている。Scamozzi, op.cit., p.46.
- 74) バルバロは、モードゥロ設定のためには、オーダー(genus)や、神殿の形式(species)が固定されていることが前提であるとしている(この箇所はイタリア語第二版にはなく、ラテン語版 p.18 にある)。cf. Caye, op.cit., p.180.
- 75) そうした類型は、空間の枠組みの鍵となるのであり、そのためには、細部、外観以上に、平面構成が重要である。それは、スカモッツィが、(想像上の)古代ローマから汲み取った普遍的な類型であり、彼は、近世においてもそれを柔軟に応用できると考えた。ハーシーが、十四世紀以来の多くの例を挙げて検証することができたように、フランスと比較すれば、イタリアにおいては、古代以来の類型を応用しやすい土壌が維持されていたということではある。しかし、タフリーが示したように、類型を成立させる(ローマ的な)自律的システムとしての「建築(architectura)」が、当のイタリアのヴェネツィアにおいても、ルネサンス以前からの伝統と衝突し、スカモッツィの幾つかの計画案が挫折したという事実にも留意しなくてはならない。M. Tafuri : *Venice and the Renaissance*, trad. by J. Levine, Cambridge 1995, chap. 7.
- 76) H. Lemonnier (éd.) : *Procès-verbaux de l'Académie royale d'architecture, 1671-1793*, Paris, 1911-1929, t. II, p.299.
- 77) Ibid, t. I, p.284, in J.-M. Pérouse de Montclos : *L'architecture à la française, du milieu du XVe siècle à la fin du XVIIIe siècle*, 2ème éd., Paris 2001, p.62.
- 78) Ch. Perrault : *Mémoires de ma vie*, Paris 1909, p.60, in Pérouse, op.cit., pp.61-2.
- 79) Pérouse, op.cit., p.69.

(2004年7月10日原稿受理, 2005年1月20日採用決定)